

政・外交の枠組を変えることなしに遂行された。」(p. 122)バンコク時代と呼ばれるタイ国史上の新しい時代は、かくして、「明確な断絶ないしは変移の一线を画することなく」(loc. cit.) 開始されたのである。著者 Wenk は、I 世王の登位をもって、いわゆる “new Siam” が始まるとする通説をしりぞけ、“in a very hesitant way” という留保をつけつつも、モンクット王の治世をもって近代タイ国の開始の時期としている。

本書はその前半において国内諸制度の復興につきのべ、後半はもっぱら旧領土の回復戦役を含む対外関係の記述にあてられているが、史料の関係もあってか、力点は後者におかれているように思われる。前者のテーマについては、つとにターニ親王のモノグラフ “The reconstruction of Rama I of the Chakri Dynasty,” *JSS XLIII*: 1 (1955) が発表されているが、本書の記述は、「パタルン年代記」「ナコンシータマラート史料」などによる、地方行政組織の叙述があるほかは新味に乏しい。今後「三印法典」などの根本史料を利用しての、さらに精緻な研究の出現がまたれる。

対外関係は、本書の中心部分をなすもので、主としてタイ語およびラーオ語史料によって、ビルマ戦役とその終結、ラーオ諸国、マラヤ土侯国およびカンボジア征服の過程があとづけられている。安南および西欧諸国との交渉史は簡潔な記述にとどまる。

1957年に Walter Vella がタイ語文献を駆使してラーマ三世王時代史 *Siam under Rama III, 1824-1851*. (New York, 1957) を発表して以来、ラタナコーシン史に対する関心はとみに高まり、今日までに、IV 世王年代記の全訳 Chadin Flood (tr.) *The Dynastic Chronicles Bangkok Era, The Fourth Reign*. 4 vols. Tokyo, 1965- , V 世王にかんするタイ語文献を訳編した Prachoom Chomchai, *Chulalongkorn the Great*. Tokyo, 1965. など、タイ語史料による研究が次々と刊行された。今回 Wenk の労作が世に出たことによって、ラタナコーシン王朝の最初の5王の研究が、II 世王をのぞき、ことごとく英語で利用可能の状態となったことを喜ぶたい。

(石井米雄・東南ア研)

National Family Planning Board,
Malaysia. *Report on the West Malaysian Family Survey, 1966-1967*.
Kuala Lumpur, n.d. xlv+534 pp.

開発途上国の人口増加はきわめて著しく、それぞれ深刻な人口問題を生み出している。マレーシアも例外ではなく、約3%に及ぶ増加率が記録されている。このような事態を背景に、この国の主要部 West Malaysia (マレー半島部) における出生力の動向をさぐるために、West Malaysian Family Survey が行なわれた。この調査はマレーシアの National Family Planning Board とミシガン大学の Population Studies Center とが協力して、1966年末から1967年はじめにかけて実施した。

報告書は四つの章および Appendix からなる。第1章から第3章までは調査方法の解説および調査結果の要約にあてられ、第4章では345ページを費やしてぼう大な量の集計表が示されている。Appendix A には West Malaysia 全域を対象として、各質問に対する解答の実数が示され、Appendix B には調査に用いられた質問票が、Appendix C には調査員に対するインストラクション、Appendix D にはコーディングに関する説明がおさめられている。

この調査の対象は15~45才の既婚女性で、サンプル数は5,457である。サンプリングおよび集計の主な関心は、大都市、町、村落という三つのグループにおける差異にむけられている。この国における生活状態を規定しているもう一つの重要な要素である民族による差異が、政治的な理由からか、あるいは調査企画者の不注意からか、十分に扱われていないことは、調査の価値をやや低めているといわざるを得ない。質問票は300以上の質問項目を含み、非常に意欲的なものであるが、この種の調査としてはやや欲張りすぎたきらいがないでもない。とはいえ、この報告書は、この種のデータに乏しい開発途上国の出生に関する現状および態度を知るためきわめて重要な資料といえよう。

(坪内良博・東南ア研)

Paul Lewis. *Akha-English Dictionary*. Data Paper No. 70, Ithaca: Southeast Asia Program, Dept. of Asian Studies, Cornell University, 1968. xxiv+363pp.

東南アジア（特にタイ国北部）における少数民族言語は俗に「未調査言語」と呼ばれてきたほど、資料の乏しいものであったが、先に紹介したヤオ語の辞書にすぐ引き続きこのアカ語の辞書が出版されたことを見ると、これらの言語ももはや「未調査」の言語ではなくなりつつあると言わねばならないだろう。著者は1949年から66年までビルマのチェントンのパンワイ（Páwè）で宣教師をしており、その間に集めた資料を辞書にしたものである。さすがに長年月を費やしただけあって、見出しの数だけで7100、複合語その他の類を差し引いても4000語くらいを含む、誠に立派な辞書である。本書のアカ語は“Jeu. g'oe. Dialect”（/jəxǝ/）であり、私の調査した北部タイのアカ語と比較してみると、初頭子音に関しては、Saenchai 村の Amya 氏その他により代表されるタイプのアカ語にもっとも近く、ほとんど相異点は見られない。中核母音、末尾子音においては、わずかな違いが見られるだけで、大差はない。ただ、本書に述べられている母音音素 <oi> /ü/ は、私の調査したいずれのタイプにも見出されなかった。また、<ui> /i/ と <eu> /ə/ との対立は本書に示されているほど明確ではなく、不安定である。ビルマにおけるアカ語ではあるが、そのまま北部タイでも通用することには疑問の余地がないだろう。声音も目立った相異はない。

本文の他に、“Introduction”と“Appendix”があり、後者は命名法、儀式名、時間（日名、月名など）の説明であり、前者は“Phonology”と“Grammar”の概略である。“Phonology”は同じ著者の論文“Akha Phonology,” *Anthropological Linguistics*, Vol. 10, No. 2 (1968) と同じである。氏の記述の特色としては、母音音素に“Laryngealized”と“Oral”の2系列を認めていること、および [ɔ] を /ɔŋ/ と解さずに /a/ <ah> と言う独立した一つの母音音素とみなしていること

があげられよう。前の点については、母音に2系列を立てるよりも、“Laryngealization”を声調類 <˥, ˦> に伴う自動的特徴とみなすほうがよいと私は考えるのであるが、後の点については、方言の相異自体に原因するとも考えられるので、本書の通り /a/ <ah> としておいても良いだろう。“Grammar”は造語法（“Word Formation”）の説明であり、短い簡単なものであるが、アカ語の特徴を非常によく捉えていると思う。また本文においては、見出し語とその他の要素との結合形があげられている場合には、結合形の訳語は与えられていない。例えば、<g'o. -eu> 《to return》の項には、他の要素との結合形として、<g'o. la~eu, g'o. le-eu, g'o. le~eu, g'o. i~eu>《（下方から上方へ）帰って来る、（上方から下方へ）帰って来る、（下方から上方へ）帰って行く、（上方から下方へ）帰って行く》が挙げられているが、この項にはこれらの訳語は付されていないのである。これは一見不親切なようだが、使用者はそれぞれ <la~eu, le-eu, le~eu, i~eu> の項を探したのちに、自分で二つの要素を総合して意味を理解することになるから、このほうが言語構造をより有機的に理解することになり、より親切な方法と言えるのである。

本書の表記法は、ビルマにおける宣教師により用いられてきた、ローマ字によるそれであるが、音素体系と規則的に対応し、かぶせ音素の表記がないことを除けば、ほとんど音素表記そのものと言っていいほどであるから、言語そのものを研究する人にとっても、またアカ語を用いて他の分野の仕事をする人にとっても、非常にありがたい価値ある書物なのである。本書の表記法を *Ma. Ku[˥] neh bo. eu gui. lah. daw.*, The British and Foreign Bible Society, Rangoon (1955) のそれとくらべると、前者における <py, by, my> が後者では <pl, bl, ml> となっている点以外には違いはない。これは両者の対象とする方言の相異に起因する可能性があり、興味深い点である。

アカ語の最も面白い特徴は造語法（形態論）にあると思われるが、その点本書は余すところなく記述しており、非常にすぐれた本で、この分野の研究者にとって欠かすことができないものと言えよう。例えば、<a. za. shi~eu> 《豚が死ぬ》という

ような文を記録するのはたいして困難ではないが、同じ意味でも、〈a, za, za, shi, shi-eu〉《豚が豚の死を死ぬ》といったような例を記録するのはなみたいていのことではないのである。

本書およびその他のタイプのアカ語については、後により詳しく述べるであろう。

(桂 満希郎)

Pisanu Intrakomhaeng. *Thai for Foreigners*. Bangkok, 1968. (個人出版) iv+327 pp.

タイ語の優れた入門書に対する要望が高まりつつある折から本書が出版されたことは、また一つの喜びとせねばならない。まず本書の構成を見ると、“Phonology” “Morphology” “Key to the Tones”の項目の下にそれぞれ概略的な説明がなされ、ついで34課から成る本文であるが、第16課の後には“Syntax”，第34課の後には“Orthography”の説明があり、これだけが“Part I”となっている。“Part II”は合計33課あり、すべて絵を使つての“Pattern Drills”である。“Phonology”は根本的には Haas のそれと変わらないが、異なる点は Haas の /j, y, ua, ia, ya/ がそれぞれ /y, i, uə, iə, iə/ と表記されていることのみである。例えば /rə/ 《(疑問)》, /khám/ 《彼》などのように、文字にとらわれずに、実際に話されている通りを表記している点は非常にすぐれているが、その反面、音素と文字との混同が見られるのは解せない。例えば 〈bhala〉は /phon/ であるが、文字にとらわれて /phol/ と表記するなどである。それならば 〈kaara〉は /kaan/ ではなく /kaar/ としななければならないのではないか。“Morphology”はごく簡単で、“Prefixes, Infixes, Suffixes”があげられているだけである。後2者については問題ないとして、“Prefixes”において、/fák, lûuk, kaan, khwaam/ が /pra-~pa-, kra-~ka-/ などと同列に扱われていることは、大いに疑問を感ずる。声調は本書の説明で充分であるが、実際に教室で使用すると、別に練習用のシートを使って補足し

なければならないだろう。第1課→第34課は“Dialogue” “Notes” “Pattern Drills” から成るが、量は他の本にくらべて少なく、教室で使った場合は2時間で終了すべきである。“Part I” “Part II”を合わせて67課あるから、1週に10時間(1日2時間で5日)とすると、だいたい14週間(3カ月半)で本書を仕上げるができる。内容から見て、日常の用を足すに不自由しない程度の基礎的な文しか出てこないから、本書にこれ以上の時間をかけるのは適当ではないが、短期間にタイ語の基礎的な語彙と構文とをのみこむには向いているであろう。本書の構文はすべて、Transformational (=Generative) Grammar にもとづいたもので、少ないスペース内に、かなり能率よく必要な構文や造語法を網羅しているが、初心者あるいは言語学の予備知識のない人達にとっては、変形文法の用語や等式の類をあまりにも強く打ち出しすぎており、むしろ奇異な感をいだかせるかもしれない。“Syntax”はすべて上記変形文法により説明され、英語と対照されていて、よく出来ていると思うのであるが、変形文法を心得た教師により説明されなければ、本書の価値を充分に利用することができないであろう。欠点としては、(1)語彙がかなり高度なものを含むにもかかわらず、構文はあまり程度の高いものではないこと、(2)ミスプリントの多いこと、(3)1冊にあまりいろいろなことを押し込みすぎたこと、(4)各課の量が不釣りあいであることなどがあげられよう。他の本である程度習ってきた人が、知識なり理解なりをさらに確かなものとし、タイ語の文法を把握するために、本書を課外用に使用するほうが適当であろう。次に、タイ語を実用的に学習しようとする人以外に、言語学的にタイ語の文法構造を記述しようとする人にとっても本書は役に立つと同時に、興味を引くものとなっている。変形文法の立場から、タイ語を分析した本はほとんどないと言っていいほどであるが、本書に示された P(hrase) S(tructure) Rules および T(ransformation) Rules を詳細に検討することにより、著者のタイ語に対する記述方法をかなり知ることができる。なお、“Thai for Foreigners”は「Thai for Foreigners whose mother tongue is English」の意であることをつけ加えておく。

(桂 満希郎)